

いっすら

ESSAY

倉元 信行

6

何 代 目

「葉子のお父さんは、リストラされても大丈夫よ」

みきえちゃんがそう言っていたと娘が言う。みきえちゃんというのは長女の友達で、私の造った焼き物を見ての言葉なのだが。

焼き物は趣味で造るから楽しいのである。仕事になったらたまらない。

魯山人はあれだけたくさん焼き物を造ったが、仕事で造っているという気持ちは無かったと思う。

ひたすら自分の料理を盛るための器を造り、ひたすら自分の美意識を表現するために造りつづけた。

それを売って儲けようなどという気持ちではあの器はできない。あれは自らが感動しながら造ったものだ。

魯山人の作品がこんなに高くなってしまったのは、矛盾するようだが、彼がたくさん造ったからである。たくさんあるものが高くなればその市場は大きくなる。

商売人にとってこんないいことはない。

もし魯山人が十分の一の数しか造っていなかったら、逆説的だが値段は今よりかえって安かったのかもしれない。

多くの作家のたくさん作品がデパートなどに並んでいるが、いいものはそう多く

はない。売るためにという思いで造った作品だからではないかと考えたりもする。

いいと思っていた作家が、有名になってくるとだんだん悪くなると感じる場合もある。思わず値段が高くなって方向を見失ったのであるうか。

瀬戸内海の小さな島で武田洋子さんという方が焼き物を造っている。

通りかかった東京大丸でこの人の小さな個展が開かれていた。

「どうでしょうか」

やや不安げな彼女の口振りだった。

「とってもいいですね」

造る喜びと詩情にあふれていた。私は壺を買わせてもらった。

だが、造ることに喜びを感じ、造ることが好きであればいいものができるわけでは決してない。

少し話は変わって、研究のことになるのだが。

企業の研究には、大きく分けると「達成型」のもの、「創造型」のものがある。達成型は目的がはっきりしていて、手段も大体用意されているか、見当が付くから、あとは時間と労力の問題になる。もちろん知恵が必要なことは言うまでもないが。

ところが創造型の方はこうじゃない。

これについてキリンビールの北村さんという方がダイヤモンド社での講演会で次のようなことを話された。

「創造的な研究と言うのは、個人の性格とか、子供の時の体験、環境などすべてを包含した幅広いものから生み出されるものなのです。小説を読んだり、音楽を聴いたり、そういう体験のすべてが入った頭脳労働であって、単に文献を読んだだけで生まれるなんて、とても思えません。きわめて個人的なものなのです」

焼き物づくりも全く同じである。単に好きだから、技術がうまいとかだけでは片付かないものなのだ。

だから、先代の技術だけを引き継いだ何代目と言う人の作品には、伝統の姿はあっても、訴える力の弱いものが多いのだろう。

